



岩手県立遠野高校

答えが1つではない問いに、グループでどのように向き合うか

生徒が設定した課題

「中学生の数学力の向上のためのアクション」

自分を変えるチャンス！ 岩手県立遠野

高校の2022年度の「総合的な探究の時間」で、「教育から地域課題へアプローチ フェーズ2」への参加を決めた佐藤千星さんは、並々ならぬ決意だった。1年次の「総合的な探究の時間」は、周囲の流れに身を任せてしまい、主体的に取り組むことができなかったからだ。

「活動が終わった時、この1年間は何だったのかと後悔しました。また同じ思いを味わうのは嫌だ。もっと自分で動くように思いました」

佐藤さんが選択したゼミのミッションは、「中学生の数学力の向上」。岩手県では、全国学力学習状況調査の数学の正答率が、中学生になると急激に下がっていた。その状況に対して、高

校生としてできることを考え、実際に行動してみようと、数学科の担当の佐藤紘大先生がゼミを立ち上げた。ゼミの活動計画書には、「本気で探究活動に取り組みたい人、自分を変える一歩を踏み出したい人を募集」とあった。自分を変えたいと思っていた佐藤さんにとって、最適なゼミだった。

6月の活動スタート時には、15人の生徒が集まった。佐藤さん同様、自分を変えたいという思いで同ゼミを選んだ浅沼大和さんは、活動開始直後から積極的に行動した。

「数学力の向上について自由にアイデアを出す場面では、勇気を出して自分から発言をしました。失敗を恐れずに行動する心地よさを、初

始直後から積極的に行動した。

お話を伺った生徒の皆さん



佐藤千星さん (2年生)



佐々木 緑登さん (2年生)



浅沼大和さん (2年生)



留場紗叶さん (2年生)



山口晴大さん (2年生)



高田耀莉さん (2年生)

遠野高校の探究学習

「新しい『遠野物語』を創るプロジェクト」と名づけられた「総合的な探究の時間」の中で実施。遠野市役所や企業、大学などの支援を受け、地域遺産のデジタルアーカイブ化、空き家の利活用、地域の食生活の改善など、12のゼミを開講。生徒は自分の興味・関心に基いてゼミを選択する。佐藤紘大先生が主催するゼミ「教育から地域課題へアプローチ」は、21年度に続いて2度目の開催。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

めて味わえた気がしました」

ゼミの活動で決まっていたことは、1月に数学力の向上のためのアクションを起こすことだけ。それまでの間にどのような活動をするのかは、話し合っただけで決まらなかった。活動を円滑に進めるため、メンバーの活動をサポートしたり、悩みを聞いたりする「監督」を置くことも決定。自分を変えるために責任ある立場を担おうと考えた佐藤さん、浅沼さんを始め、5人が監督を務めることになった。また、担当の佐藤先生と親交のあったVIEWnext編集部統括責任者の柏木崇を社会人アドバイザーとして迎えることも決まった。

中学生の数学力が低下している原因を

探ろうと、生徒はグループに分かれて、中学校の教師や中学生への聞き取り、学力や学習意欲に関する調査研究データの収集を開始した。しかし、活動はすぐに停滞した。グループ内でのコミュニケーションが円滑に進まなかったのだ。生徒は週2コマの授業時間以外にも、放課後の時間やSNSを利用して話し合いを行ったが、思ったように意思疎通が図れなかった。

「書籍やウェブサイトで情報を集めている時は、誰よりもよい提案をしようという気持ちで前向きに取り組んでいました。でも、ほかのメンバーと数学力の向上のための具体的な方策を話し合う段階になると、自分の考えをうまく伝えられなかったですし、メンバーの意見もうまく

引き出せませんでした。自分は全然駄目だと、すごく落ち込みました」（浅沼さん）

「意見を言っただけという気持ちで先走って、SNSにきつい口調で書き込んでしまったこともありました。状況は変わりませんでした。声のかけ方が下手すぎると、自己嫌悪に陥り、監督をやめたいと思いました」（佐藤さん）

部活動を優先し、放課後やオンラインでの

打ち合わせに欠席する生徒も出てきた。監督の1人、佐々木緑登さんは、そうした状況を打開しようとして、全員に昼休みに集まってもらい、「ゼミの活動に力を入れよう」と呼びかけた。だが、それもすぐにはうまくいかなかった。

「『一緒にやろう!』と声をかけている最中に、なぜか、自分の言葉がみんなに届いていないことが分かりました。実際、その後のSNSでの返信率も上がらず、どうすればよいのかと途方に暮れました」

全員の熱量が高まる転機は10月に訪れた。

佐藤先生は、社会人アドバイザーと相談し、取り組みを加速させる機会として、オンラインでの「企画プレゼンテーション」を実施することに決めた。監督の1人、留場紗叶さんは、高校生とは全く違う視点からのアドバイスに耳を傾けながら、自分たちの考えがどんどん深まっていく気がしてワクワクした。

「自分たちの考えを否定することなく聞いてもらえて、これからするべきことを一緒に整理

図 佐藤千星さんの活動に対する主体性の変化



してもらえた気がしました。企画プレゼンテーションの翌日、すぐに担当の佐藤先生に、『とてもよい時間でした!』と報告に行きました」

野球部の顧問に相談し、練習と折り合いをつけてプレゼンに参加した山口晴大さんにとっても、社会人のアドバイ스는発見の連続だった。

「考えが甘いところをたくさん指摘されましたが、『こんなふうに考えるのか!』と驚くばかりでした。1時間以上議論したので、とても疲れましたが、一気に前進した気がしました」

「一緒にやろう!」という呼びかけはすぐに届かなかったが、「昼休みにみんなが集まって、ゼミについて気軽に話そう」という佐々木さんのアイデアは奏功した。

「SNSでは議論が進まなかったのに、毎日短時間でも対面で話すようにしたところ、いろいろなことが決まっていきました。もともと早くから、気軽に話し合える場をつくれればよかったですと思いました」(監督の1人、高田耀莉さん)

11月、各グループからの企画の最終提案を経て、ゼミのアクションとして決まったのが、地元の中学生を招いて、様々な数学の問題に挑戦してもらおうイベント「数学を楽しもう・深めよう」だ。遠野市役所と連携した中学校へのPR、数学の問題の精選など、するべきことが具体化すると、生徒の活動はさらに加速した。1月末のイベント当日は29人の中学生が参加。そして2月、全校生徒に対して行われたゼミの成果発表後の

アンケートでは、「自分にとって学びや気づきがあったゼミ」、「発表を通じて最も感動したゼミ」で、いずれも佐藤先生のゼミが1位を獲得した。

生徒の中には悔いも残った。

「最終的に私は、自分たちのグループの企画よりも、ほかのグループの企画の方がゴールと手法が明確だと思い、そのグループに合流しました。でも、そのグループの人たちに遠慮して、主体的に動けなくなり、去年までの自分に少し戻ってしまった気がしました」(佐藤さん)

一方で佐藤さんは、自分の変化や成長も感じ取っている。

「ゼミの活動を通じて、自分にはなかった視点にたくさん気づけました。問題の解決に向けて複数の視点があるということは、1つの方法が駄目でも、別の方法で試せるということです。私は将来は教師になりたいと思っていますが、生徒が困難にぶつかった時、いろいろな視点で継続的に支援できる教師になろうと、今回の経験を通じて自分の将来像が明確になりました」

2月末、職員室にいた佐藤先生を浅沼さんと佐々木さんが訪ね、「来年度も、中学生の数学力の向上のためのアクションを考えたい」と申し出た。浅沼さんは佐藤先生にこう言った。

「つらいことや苦しいことがたくさんあった探究学習だったけれど、根拠を明確にすること、対話して考えることの大切さを学びました。そのすべてが僕の財産です」

図 高田耀莉さんの活動に対する主体性の変化



●学校概要

設立 1901(明治34)年
形態 全日制/普通科/共生
生徒数 1学年約100人
2022年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、室蘭工業大、弘前大、岩手大、山形大、茨城大、釧路公立大、岩手県立大、横浜市立大などに17人が合格。私立大は、岩手医科大、富士大、盛岡大、東北学院大、東北芸術工科大、獨協大、国士館大などに延べ53人が合格。

担当教師 と考える 「探究学習における主体性」



岩手県立遠野高校
2学年担任
佐藤 紘大 さとう・こうだい
教師歴 10年。同校に赴任して5年目。数学科。



VIEW next編集部 統括責任者
柏木 崇 かしわぎ・たかし

探究学習のプロセスの中で、
様々な生徒が入れ替わるように活躍

柏木 前半の活動では、主体的に動けないメンバーを、監督の生徒たちが引っ張ろうとしましたが、なかなかうまくいきませんでした。監督の1人である佐々木さんは、「後になって考えると、引っ張ろうとするのではなく、任せようとする態度でみんなに接した方がよかったかもしれない」と、私に話してくれましたが、一人ひとりが主体性と協働性を発揮する集団づくりの難しさを、私もひしひしと感じました。ただ、前半の活動で活躍したのは、熱量が高まりきれない生徒を引っ張ろうと苦勞した監督たちであったことは確かです。そして、後半の活動で活躍したのは、前半は部活動優先であまり動けなかった生徒たちでした。

佐藤 前半と後半で活躍する生徒が交替したのは、本ゼミの大きな特徴だったと思います。前半、ゼミをどの方向に進めればよいのか全く見えない中で、勇気を持ってみんなを導こうとした生徒、企画が具体化してからイベント当日までの活動を牽引した生徒、イベント後の校内の成果発表で力を発揮した生徒と、様々な生徒が入れ替わるように活躍しました。私は、成長する組織は、きっと本ゼミのように、いろいろな人が自分の長所や強みを生かして、互いに助け、助けられる組織なのだと思います。生徒にとって本ゼミは、社会の縮図のような場だったのではないのでしょうか。

柏木 「中学生の数学力の向上」という、考えられる方策が1つではない課題に対して、情報の収集、整理・分析、具体的なアクションの企画・実行、そしてまとめ・振り返りと、多様なプロセスを経験する探究学習だから

こそ、様々な生徒が入れ替わるように活躍できたのかもしれない。

ただ寄り添うだけではなく、
気づきの機会を与える

佐藤 私たち教師には、探究学習のプロセスの中でヒーローやヒロインが交替するチャンスをつくるのが求められると思います。探究学習における教師のあり方として、「伴走」という言葉がよく使われます。私にとって、これまでの伴走は、思い思いの方向にそれぞれのペースで進んでいく生徒を見守り、求められた時に助言などを行うというものでした。しかし、今回のゼミの活動を通して、探究学習における教師の伴走とは、生徒が活動の中で学びや気づきと出合えたり、自分の考えを整理し、意思決定したりする機会を意図的につくることだと考えるようになりました。その象徴的な例が、柏木さんにも協力してもらった社会人アドバイザーによる企画書の添削です。

柏木 企画書の添削では、私を始めとする社会人との対話を通して、自分の考えを整理したことで、その後の活動に没頭できた生徒がたくさんいました。

佐藤 社会人アドバイザーと対話する中で、生徒は自分たちに足りないものが分かり、今後の活動の見通しを立てることができたのだと思います。企画書の添削を経て、ほかのグループの企画に参画した生徒もいましたが、それも立派な意思決定だと思います。活躍する生徒を教師が入れ替えるのではなく、生徒自らが新しいヒーロー、ヒロインとして立ち上がるきっかけをいかに作るか……。私にとって、これからの探究学習を考える重要な問いが見つかりました。

柏木 活躍する生徒が入れ替われれば、当然、活動が停滞、失速する生徒も現れます。最終的にほかのグループに合流した佐藤さんは、元のメンバーに遠慮して、主体的に活動できなくなったと振り返っていました。

佐藤 佐藤さんと浅沼さんは、「自分たちが経験した停滞や苦しみは、意味があるものだと思う」と私に話してくれました。探究学習で変わりたい、成長したいと考えた2人の願いは、見事に実現しました。

柏木 悩み、苦しんだ探究学習での経験は、それぞれの生徒の人生で価値あるものとして輝くはずですよ。

遠野高校の佐藤紘大先生と純心女子高校の榎本六秀先生が、生徒主体の探究学習をテーマに語り合いました。その模様を取材したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください(右記の2次元コードを読み込み、またはクリックしてアクセス)。VIEWnext ONLINE ▶

